

ゴイズムのなかで、逃れがたく互いの差異を抱え込んでいる。また正しさや美しさそして優しさすらも、決して無垢なものとして存在しているわけではなく、あくまでも時代の產物として姿をあらわし、我々を巧妙にからめ取り、その気にさせる。そうした「現代」は、そこに生きる者の実感としては、「あなたも」「わたしも」互いに通わす言葉を持てず、デイスコミュニケーションとすれば違ひが当たり前になつてゐる、むしろ葛藤と闘争の場（アーナ）なのではないか、とさえ思う。そうしたなかでは、「現代」を語る話、「現代の民話」を共有していくという過程は、実は、「誕生以前の記憶」や「日本人の心に潜む民俗の深層」が保証してくれるのでなく、むしろ我々自身が試行錯誤しながら生み出していくしかねばならないのではないか。もう少し踏み込んでいうなら、こうした共同性は、我々がどのような時代のなかで生き生かされ、そこにどのような歴史の過程が刻まれているのか、それを問い合わせられた「問題」を自覺し共有するという過程のなかで、からうじて生み出されるのではないかと思うのである。

だから僕自身は、「誕生以前」や「深層」

という言葉を禁じ手にして、あくまでも歴史の表層と現代の日常の表層にこだわりたい。他者を死にまで追いやることのある異物排除の想像力を獰猛に發動する話や、國家の物語に対しても我々自身がその気になつて支えていく美談のありようまで含めて、我々の危うさを語る話をも見つめる必要があると思ってい

る。今、この時代を生き、それと関わり、考えようとする者にとってどのような道筋が有効なのかは、わからない。もちろん一つの道筋だけが有効なわけではない。僕自身が、自分

が選んだ道筋のなかで、いつか松谷の「あなたも語り手、わたしも語り手」という思想に一度松谷みよ子の「現代の民話」論を読んでみたい。「学」という作法と制度の枠組みを越える射程を持つて綴られた本書は、我々にそんな自分自身の立ち位置そのものを問いかけてくるのである。

（中公新書、一〇〇〇年八月、中央公論新社、七〇〇円）

（しげのぶ・ゆきひこ／北九州市立大学）

## 書評

### 石井正己著『遠野物語の誕生』

石井正己著（浦田穂一「写真」）『図説・遠野物語の世界』

藤井貞和

「初稿本」の書き出し部分が、わずか一丁

いま私のまえに、古びた『寺小屋雑誌』7号ながら、かすれたコピーのような体裁で、かげられる。毛筆での、「遠野は今岩手縣上田國男『遠野物語』初稿本」という「新資料開伊郡二属す」以下を、そこにたどり読むことができた。

寺小屋教室——寺子屋が正しいと思えるものを見いだす。これが私には出会いだつた。

のなぜか「寺小屋」と称していた——の、校本、と言い換える。この言い換えがはるかに正確な見通しであることは説得的である。

柳田國男研究会にまで、さつそく私は赴いて、

コピー全体を見せてもらった。従来は『増補

版遠野物語』（一九三五年）によって、写真

版、ならばに折口信夫の解説により、四丁の

み知られていた資料である。『柳田國男研究』

（一九七四年一月）での、池上隆祐（所蔵者）

インタビューをへて、右記小田論文により、

その全貌が明らかになる日は近づいていっ

た。その前後、そのものの、後藤總一郎氏以

下の、研究グループによる、柳田伝記への、

めざましい進展については多言を要しまい。

歳月ののち、新たな研究の季節がやつてきて

た。石井正己氏は遠野市にかよい、その「初

稿本」を丹念に読むことから、研究を開始す

る。このたびの著である、『遠野物語の誕生』

の「はじめに」を見ると、これまで便利に使

いまわされてきた『遠野物語』を、それ自身

のために立ち上げることにあつた、と本書の

意図が宣言される。

民俗学、歴史学、社会学、……といった、

學問の枠組みを大きく逸脱する本、という指

摘はそのまま『遠野物語』の内容の“逸脱”を

言い当てていよう。なお石井氏は「初稿本」

「再稿本」「校正本」を、草稿本、清書本、初

校本、と言い換える。この言い換えがはるかに正確な見通しであることは説得的である。

まずは佐々木喜善の、関与という、言われ

てきたことの実態に分け入らなければならな

かった。I 「佐々木喜善と水野葉舟、柳田國

男」は、水野の小説や小品、そして喜善によ

る話を、水野が「怪談」に記述してゆくあた

りを追う。時代はまさに怪談ブームだった。

柳田も同時代の、おなじ空気をすいながら、

しかし決定的に分かれてゆく。『遠野物語』

の誕生である。

小田氏が、もし喜善のメモが発見されるなら、……と述べていたことは、石井氏のII 「草稿本『遠野物語』」の書き入れ、III 「草稿本『遠野物語』」の文体で、喜善による補足、書き入れや、さらには原稿用紙に書かれた喜善による文章があることを指摘する

ことに結実する。『遠野物語の世界』のほう

では、写真版で掲げられる、鉛筆書きの資料

で、たとえば「紅皿ノ話モアリ欠皿ノコトヲ

ヌカホ（空穂）トヨノノミ」云々とあるのは、

『遠野物語』（清書本）一一八の「紅皿欠皿の

話も遠野郷に行はる。只欠皿の方はその名を

ヌカボと云ふ」云々の箇所に取り込まれる。

それは喜善による鉛筆書きだという。

清書本ではストーリーをつくることができず、それに対して鉛筆書きのほうは紅皿欠皿の昔話の内容に立ちいった書き方を見せる。

つまり、柳田の草稿に喜善は手を入れ、また

書いたメモを柳田にわたすことをすらした痕

跡だ、ということになろう。聞き書きどころ

か、喜善のメモをほぼそつくり取り入れた形

跡もあるという、深い関与のしかたはきわめ

て興味深い。

人名や地名のありかた、時間の表現のしかた、「伝説」としての文体の苦心などを、石井氏は「事実」をつくりあげてゆく方法として注意する。たとえば「たり」「り」という助動詞が頻出する。それらは内にある時間を前面にだす。出来事そのものは本来、過去でしかありえないとしても、それを「たり」で表す。これにしても、過去へと読者が同化させられる働きだ、という理解となろう。明治

「り」が、目前の、また現在の事実にしてみせる。「き」という過去の助動詞も多く見られる。これにしても、過去へと読者が同化させられる働きだ、という理解となろう。明治文語文はこのような基礎作業を不可欠の要素

とするところだろう。

「目前の出来事」「現在の事実」という臨

場感が、こうした「たり」「り」などの文語

体に、かけがえない表現方法を負う、という

ことは、反面に、「けり」という、古典などに見られる、したそだ、と、といつた感じの、伝承性をのぞかせる語を使用する文体が、ほとんど見られない事情を、そのままで説明する。「けり」は時間の経過をあらわす助動詞であるために、伝承性に傾きやすい、という事情をここに付け加えておいてもよからう。)

「と言へり」によって、外にある時間であることを示す。「といふ」「とのことなり」「とぞ」「となり（也）」いうような表現もまた多くある、という。そのように「言ふ」のはだれか。遠野郷の人々が、ということを明示したことになり、ここにも臨場感を生む要素がある、ということだろう。喜善にまで伝わってきた話が、いよいよ、だれともつかぬ話し手へと手渡されて、創作でなく、たしかな言い伝えだ、という印象をつよく与える装

置となる。

怪談が実際に、近代口承芸文の、文字通り指標であることは見やすい。本書『遠野物語の誕生』でも、さまざまな視角から、怪談学や近代文学との接点をさぐり明かす。柳田の『遠野物語』の誕生は、そういう怪談からの、距離の成立という側面がある、ということだ

ろう。成立「前史」で、幽冥から天狗へ、という柳田語彙の変遷がある。先住民という語と見てとれる。実態はなかなか複雑で、石井氏は初稿本と清書本とを比較し、天狗と山男との棲み分けといったことも示唆をかさねながら、柳田の理論からついに天狗が排除されゆく、と見る。山男、さらには山人が、かわって前景化する。

井上円了の『おばけの正体』（一九一四年）

は、妖怪ばなしの結末にオチをつける、つまり天狗なんか結局、存在しないんだと否定する叙述のしかたに対し、『遠野物語』が、そのようなオチをもたないことを対照的な叙述とする。井上のようないわば近代派に対し、柳田は徹頭徹尾懷疑して行つた。円了に傾倒したのは佐々木喜善であるけれども、遠野の草深い不可思議の世界をかたく信じていた喜善が、ついに円了妖怪学に失望するらしいの

VI 「怪談」と『遠野物語』では、これまでの叙述のしかたに対し、『怪談の研究』（『中学世界』一九一〇年三月号）によつて、さらには同年の、柳田談という「山人の研究」（『新潮』四月号）を「発掘」する。

これらがどんなに重要かは、『遠野物語』の清書本の直前という状態にある、といふともそうだが、「真個（ほんたう）の話」と「嘘と知りつつ話す」のとの区別といふことや、いまで言う「伝説」の地域性（と類型）

という、たいへん重要な視野で柳田が考えていたことを明かしてくれる。のちに奄美説話研究の山下欣一氏が「眞実の話」という

『遠野物語』の成立にかかわり、『石神問答』（一九一〇年）に立ちいる章が、V 「石神問答」の意義で、従来は「後狩詞記」（一九〇九年）に『遠野物語』がむすびつけられるのみだったのに対し、同年発行の『石神問答』の成立に注目する。新聞廣告に、「……西洋の学者に手を下されると悔しいからちよいと先鞭を著けて置くとのこと也」とあつて、『遠野物語』の巻頭に「此書を外国人に在る人々に呈す」とあるのと通底する、と石井氏は指摘する。

あらためて「怪談」にささげる一章である、VI 「怪談」と『遠野物語』では、これまでの叙述のしかたに対し、『怪談の研究』（『中学世界』一九一〇年三月号）によつて、さらには同年の、柳田談という「山人の研究」（『新潮』四月号）を「発掘」する。

ような術語でつきつめようとした課題との接点が見てとれ、「遠野物語」の真意がそういうところにあった、ということを思い合わせる。

VII 「『遠野物語』の清書から印刷へ」では、本作りという興味深い工程にわけいる。最終段階で人名が省かれるなどの揺れを見せつゝ、どう印刷本が成立してゆくかをたどってゆき、ついでVIII 「『遠野物語』の発行」は、例の、遠野のひとたちに読んでほしくない、と柳田が思つた理由や、受け取つた佐々木喜善の感慨、また「遠野物語」の読者を確認する作業、とつづけられる。

IX章、X章は、興味深い、泉鏡花論、芥川龍之介論であり、本書の締めくくりをなす。「遠野物語」は、藤村の批評、花袋の酷評、そして鏡花の「遠野の奇聞」と、批評があい次ぐ。鏡花には鏡花の反発があり、それに対して柳田が「反論」するのは、類型と地域性とにかかる例の難題で、しかし亡くなつたときには深く追悼する。

一方、芥川が「河童」（一九二七年）を書いたのは、純粹に柳田の著述を読んであつた。小説であるにしろ、柳田には、水の童子である神聖さが、すこしくパロディ化され

ていることに、不満が起きないはずはない。石井氏の著書はそのあたりまで丁寧にえがきあげた。

本書を『遠野物語の誕生』という。書物を

一般に時代から切り離した論じ方で論じることは、世にひろく行われる傾向にあるけれども、本書はあくまで、『遠野物語』の刊行を、同時代に置いてみると、という態度をつらぬいた。それは聞き書きの開始から、刊行直後までの、二年あまりということになる。その間に「誕生」をくりかえした『遠野物語』を、過不足なくえがいて見せた。

もう一冊の、河出書房新社『図説・遠野物語の世界』は、遠野の民俗写真を撮りつけた、浦田穂一氏の写真によつて、遠野のいまにいざなわれる装置を獲得したといえる、必見の書としてひろく読者に提供される。

一八〇〇円)

（ふじい・さだかず／東京大学）

## 書評

小松和彦編

### 『記憶する民俗社会』

小 池 淳 一

本書は「記憶」をキーワードとして編まれた意欲的な伝説研究の書物である。ひとまず

一 本書の主題と構成

で「『遠野物語』の世界」につづいて「遠野の語り部たち」という章がある。佐々木喜善はおよそ六冊の昔話集を出したひとで、そのうちの遠野については『老嫗夜譚』（一九二七年）を最初とする。その口絵に老嫗・辻石谷江の写真があつて、最初期の、語り手の写真といつてよからう。現代での語り手たちをも写真とともに紹介する。「遠野と民俗学者たち」の章では先駆的な遠野研究者である山下久男らを集める。

あたらしい『柳田國男全集』第2巻（筑摩書房、一九九七年）によつて、うえの初稿本が容易に読まれるようになったことを付記しておかなければならぬ。

『遠野物語の誕生』若草書房、三三〇〇円、『遠野物語の世界』河出書房新社、『図説・遠野物語の世界』河出書房新社、（ふじい・さだかず／東京大学）